【論　文】

池田光政ほか筆『射山百首和謌』（林原美術館蔵）について

原　豊二
（ノートルダム清心女子大学）

摘　要

池田光政（一六〇九～一六八二）は多くの歌書を書写したが、その中には日本古典文学研究上重要なものも多い。林原美術館所蔵の『射山百首和謌』は後鳥羽院による「正治初度百首」の異本にあたるものと考えられるが、頓阿の手を経ている点、多くの異文が含まれている点、また後鳥羽院の歌人たちへの下命時期の記載のある点など、現存する他本には見受けられないところが多い。本稿では、その資料的な価値を認め、ここに紹介するとともに、その伝来に関わる考察も加えている。

キーワード：池田光政　後鳥羽院　頓阿　正治初度百首　射山百首和謌

一、はじめに

本資料は後鳥羽院が正治二年（一二〇〇）に主催した『正治初度百首』のうち、十人の歌人に絞って編まれたものである。本資料の価値は、まず『正治初度百首』の最善本の一つとして認定されることである。また、新編国歌大観の底本となった宮内庁書陵部本と比べて、本文ならび歌順に独自のところが多い。次に、南北朝期の歌人である頓阿によって『正治初度百首』の改編された痕跡を奥書が示すことである。よって、この本は一種の異本とも言い得る。最も特徴的なのは、末部に「賜題次第」の記述があり、いつ誰に歌題が命じられたのかが示されていることである。従来、この百首歌についての動向を示す資料として『明月記』や『正治二年俊成卿和字奏状』などがあるが、本資料の記載によって理解される事実は、従来の資料からは窺えない内容も含まれている。

二、内題と作者目録

内題、ならびに作者目録を、写本における位置そのままに見てみる。

射山百首和謌　正治二年

①前斎院式子内親王　③宜秋門院丹後
④小侍従　⑤前僧正慈円
⑥御室守覚法親王　⑦五条三位入道後成釋阿
⑧左府入道實房公静空　⑨定長入道寂蓮
⑩師光入道性蓮
②二條院讃岐

まず内題の「射山百首和謌」であるが、これについて考えたい。本資料は改編され、小部となったとはいえ現行の『正治初度百首』の類似書として認定できる。もちろん「正治初度百首」という表記自体にも従来から揺れがあって、続群書類従本では「正治二年院百首」などとあり、一定したものとは言いがたい。こうした書題の揺れを踏まえた場合においても、本資料のように「射山百首和謌」という事例は他に見当たらない。そういう意味で特別な書題を持っていると言える。

さて、このうち「射山」という表記であるが、これは「藐姑射の山」の省略形で、仙洞つまり上皇のことを示している。実際、このような用例は数多く見受けられる。[1] また、平安期の散佚歌集に『射山集』というのがあるが、これは太上天皇の御集であろう。[2] よって、後鳥羽院においても「射山」という語は当てはまるわけで、院主催の百首歌をよく表す書題として相応しい。本稿では、この内題を尊重して、本資料を「射山百首和謌」と表記することにしたい。

内題の下部に「正治二年」とある。当然、これはこの百首歌が催された時期を言うのであるが、書題として含むべきかは判断に迷う。他本にはすべて「正治」ないしは「正治二年」とあるから、[3] それを尊重すべきであるという考え方もできる。しかし、本資料に限って言えば、この「正治二年」は「射山百首和謌」という表記の下に、少し離されて、やや小さく右寄りに書かれているのであるから、書写者の意識において、これは書題ではなく、百首謌の開催年を記したものと思われる。よって、ここでは「正治二年」は書題としないこととする。

次に作者目録であるが、歌人の頭に記した数字は、本資料で実際に配置された歌人の順番である。本来は、二行目下に入るべき讃岐が最後に記されているところに乱れがある。これらの十人の歌人が女性と出家者に限られている点は特に注目されるが、このことは後述する。本資料の作者目録は順番にやや乱れがあるものの、この通りの人物の詠歌が収載されており、作者目録としてはおおよそ順当に受け止めてよい。

三、賜題目録

次に巻末に附載された「賜題次第」を見てみよう。

人々賜題次第
　正治二年七月十二日
御製　仁和寺宮　左大臣
内大臣　前座主　入道左府
釋阿　経家卿　季経卿
隆信朝臣　生蓮　寂蓮
小侍従　讃岐
　同八月九日
権大納言忠良卿　冷泉大納言隆房卿
定家朝臣　家隆朝臣
　同八月中旬

前斎院　丹後
　同八月下旬
　三宮

これは後鳥羽院からの各歌人への詠進の下命の時期を示すものである。一見して四期に分け、それぞれの歌人に下命されていることが理解できる。

『正治初度百首』における後鳥羽院の下命については既に先行研究がある。まず有吉保氏は諸資料を精査した上で次のような仮説を提示した。

第一次参加　七月十五日下命
　御子左家系―俊成・寂蓮・隆信・慈円
　六条家系―季経・経家・實房・師光
第二次参加　八月八日下命
　御子左家系―家隆・定家
　六条家系―隆房・忠良（第一次かも）
第三次参加　八月十五日下命
　御子左家系―〔式子〕・〔良経〕・讃岐・丹後
　六条家系―〔惟明〕・〔守覚〕・〔通親〕・範光・小侍従[4]

この有吉説を承け、山崎桂子氏は以下のように述べる。

その第三次下命の歌人であるが、有吉氏は八月二十五日に詠進していない讃岐・丹後・式子・良経の他、『明月記』で動静の窺われない守覚・通親・範光・小侍従などを慎重に処理され、ここに推定されたものと思われるのだが、これらの歌人には一見して第一次下命に入っていてもよさそうな歌人がいるのも事実である。

（中略）

すると有吉氏の推定による第一次メンバーは、（中略）八人のみである。これに御製が加わったとしても九人である。後鳥羽院の初めての催しであり、経家の策略もあったとは言え、院の和歌への興味を誘う企画としてはいささか面白味に欠け、規模も小さすぎる気がするのである。

（中略）

つまり当初の計画では詠進者十四名からなる百首歌だったのではないか。

その上で、山崎氏は下命について次のような新たな提示を行った。

第一次参加　七月十四日下命　十四名
　院
　御子左家系―俊成・寂蓮・隆信・慈円・讃岐・式子
　六条家系―季経・生蓮（師光）・静空（實房）・経家・小侍従・通親・守覚
第二次参加　八月八日下命　四名
　御子左家系―家隆・定家
　六条家系―隆房・忠良
第三次参加　八月十五日頃下命　四名
　御子左家系―丹後・良経
　六条家系―範光・惟明[5]

さて、山崎氏の表記法に改めて、本資料の「賜題次第」の内容を確認してみたい。

第一次参加　七月十二日下命　十四名
　院
　御子左家系―俊成・寂蓮・隆信・慈円・良経・讃岐

池田光政ほか筆『射山百首和謌』（林原美術館蔵）について（原　豊二）

六条家系―季経・生蓮・静空・経家・小侍従・通親・守覚
第二次参加　八月九日下命　四名
御子左家系―家隆・定家
六条家系―隆房・忠良
第三次参加　八月中旬　二名
御子左家系―式子・丹後
第四次参加　八月下旬　一名
六条家系―惟明

山崎氏の提示した想定と本資料の内容は実はほぼ一致すると言ってよいのである。山崎氏の慧眼については何も申し上げることはないが、本資料が山崎説の大きな根拠となるだろうことだけは強く述べておきたい。

その上で若干の相違点を述べると、線部で記したうち良経と式子の位置が異なるということがある。仮に本資料の記載の方が正しければ、式子内親王の病気と関係があってのことだろうか。『明月記』は正治元年（一一九九）五月から断続的に式子の病の記事が続き、建仁元年の正月に亡くなっている。なお、本資料には範光の名はない。

次に下命の日時にも相違がある。まずは第一次下命についてであるが、『明月記』に初めてこの百首歌の件が表れるのは七月十五日条である。この段階で定家には歌題は下命されておらず、自分が入れられないことについて「僻事なり」と記している。ここで「昨日の百首」とあることから、後鳥羽院からの下賜は前日の七月十四日という推察を山崎氏はしているわけである。一方、本資料の記載では、その二日前の七月十二日ということになっている。このことについての答えを稿者は持たない。

第二次下命については、『明月記』と『拾遺愚草』により八月八日のことであると了解できる。しかるに、本資料では九日となっている。なお、第三次（八月中旬）については、ほぼ同義と考えられるが、本資料では第四次（八月下旬）のあることが目新しい。

本資料『射山百首和謌』は山崎桂子氏の想定とおおよそ適合する内容を持つものであり、そこに認められる若干の相違から下命に関する新たな見解を導き得るものである。よって、『正治初度百首』の成立について考える場合、本資料は大変有益であるということが言える。そのことは、『新古今和歌集』の編纂を行った後鳥羽院の歌壇の初期の状況を考える上でも、同様に有益となるに違いない。

四、奥書

次に本資料の奥書を見てみたい。

（奥書①）
本云
延文元年十二月借請洞院前相国本書写畢
（奥書②）
延文三年六月一日申出聖護院宮御本誂褻髪幸熊君書写畢　頓阿

試みに、この二つの奥書を訓読してみたい。

（奥書①）
本云はく
延文元年十二月、洞院前相国本を借り請けて書写し畢んぬ。
（奥書②）

延文三年六月一日、申し出でて、聖護院宮御本より褻と髪とを幸熊君に誂へて、書写し畢んぬ。

頓阿

まず、奥書①の方であるが、この本が「延文元年（一三五六）十二月」に「洞院前相国本」を借り請けて書写されたことがわかる。「洞院前相国」は洞院公賢のことである。この頃、後光厳天皇による百首和歌のことで公賢らは忙しく、その日記『園太暦』には、百首歌に関連したか、歌書の貸し借りのことが記されている。『園太暦』延文元年十二月二十日条にある、同十九日の徳大寺公清からの書簡に、『千五百番歌合』を返す旨の内容が記されている。なお、公清は公賢の女を妻としている。

次に奥書②であるが、これは奥書①のおおよそ一年半後にあたるものである。奥書①の「洞院前相国本」を祖本とした「聖護院宮御本」を基にして書写したということであろう。なお、ここに記される「聖護院宮」は覚誉法親王を指すと考えられる。頓阿の家集『草庵集』からは、頓阿と覚誉法親王との親交が認められる。

さて、奥書②には「褻」「髪」とある。ここの部分の解釈は慎重でありたいが、「褻」を「けがれ」と解釈して「女性」の意としたい。また、「髪」は「出家者」であると推定する。女性と出家者を選んで新たに「誂へ」たということであれば、それは本資料に載る歌人の属性と全く一致している。なお、正治二年の段階で、女性のうち三人、つまり式子内親王、讃岐、小侍従も出家しているが、このことは特に考慮しなくてよいだろう。ただ、どのような意図で女性と出家者を選んだのかはよくわからない。考えられるのは、頓阿自身の信仰の問題というよりも、むしろこの十人の詠歌が、歌人自体の高齢もあって、相対的に円熟していたということなのではないか。その意味で、この百首歌全体の撰集という面もあったと考える。

頓阿は著名な歌人でもあり、また歌学書も残している。このような人物が、女性と出家者の歌集として、これを再編させたというわけである。そこに一定の価値と、『正治初度百首』の受容の一片を見たい。けれども、奥書②を見る限り、これは「幸熊君」なる人物の書写であり、頓阿自身の書写ではなかった。

以上、奥書①ないし奥書②から想定されることを記した。洞院公賢を中心とした文芸サロンにおいて、この本が書写されたということを、まずは確認しておきたい。公賢は当代きっての公卿の重鎮であり、この本の由来を示すのに十分である。また、頓阿やその周辺の文芸活動とも敷衍して、本資料が頓阿作成本にルーツのあることも確認しておくべきであろう。けれども、新編国歌大観の『正治初度百首』の底本である宮内庁書陵部本などとは、その書承系統が異なっているらしく、そのことは本文の異同において確認できるところである。内題の「射山百首和謌」というのも、その系統の違うことをよく表しているようだ。本文の問題は後述するとして、本資料の奥書からも多くのことが理解できる。

もっとも、現存する本資料『射山百首和謌』は近世前期の書写である。よって、ここで「奥書」としたのは、いわゆる「本奥書」であって「書写奥書」ではない。つまり、この奥書にある通りの頓阿作成本（ないしはその子本）を書写したのが現存本ということである。要は池田光政が頓阿作成本を入手し、彼らによってこれが厳重に写されたというわけである。

五、書誌と伝来

次に本資料の書誌を見てみよう。

【書誌】

外題　ナシ

内題　「射山百首和謌（正治二年）」

池田光政ほか筆

整理番号　５０４―３

表紙　藍色、菱紋・花紋（貼紙「準備　雑甲第七九號」）

見返し　装飾、原装

料紙　鳥の子・薄様混ざり、色紙多い

数量　一冊

寸法　縦一八・六センチメートル

　　横一六・八センチメートル　（舛方本）

全一一七丁（遊紙　前一丁、後五丁）

本文一〇行　和歌一首二行

大変豪華な作りの本である。書写者であるが、どうやら池田光政とその娘である奈阿子、その家臣である伊木の分担書写のようである。各担当部分の冒頭に朱で「光」「ナア」「伊」とあることで、それと知れる。娘の奈阿子がその書写に加わっていることから、光政のあまり若い時期のものでないことは確かであろう。もちろん寛永九年（一六三二）以降、光政が岡山藩主になってからのことであろう。

池田光政が歌書を多く書写していたこと、またその多くが林原美術館に現蔵されていることは既にいくらか示したが、[6] この『射山百首和謌』の書写に関わる動機は何だろうか。『池田光政公伝』下巻（池田家、一九三二）は後鳥羽院に関わる光政書写資料について、以下のものを挙げている。「二三、後鳥羽院百首　一巻」「二四、正治二年御百首　一巻（以下、小字で）正治百首　正治俊度百首（ママ）　弘長百首　延文御百首　永享百首　将軍家御百首　丹後守爲忠百首」「三〇、射山百首　一冊」「四〇、仙洞五十首和歌　一冊（以下、小字で）竪四寸一分　横四寸三分」「五二、時代不同歌合　百五十番　一巻」であり、後鳥羽院への執着らしきものも感じるわけである。

さて、後鳥羽院は承久の乱で隠岐に流されたが、その子である頼仁親王は備前国児島に流された。なお、当時、児島は本州と陸路でつながっておらず、島嶼の一つであった。また、頼仁親王の配流を前に、親王の異母兄、覚仁法親王も備前に移っている。頼仁親王はこの地で仏門の振興に尽力したようだが、現在の倉敷市木見にはその墓所が残されている。同じく倉敷市林にある五流尊瀧院には、後鳥羽院の一周忌供養のために両親王が造った「後鳥羽院御影塔」があって、現在、国の重要文化財となっている。この御影塔は当時の状態のままである。このように、備前国児島郡には後鳥羽院のゆかりのものが多く、岡山藩領に児島郡のすべてが含まれていたことから、光政は後鳥羽院への意識も高かったのではないだろうか。もっとも、光政がかつて鳥取藩主であったことも踏まえれば、因幡・伯耆から見て隠岐は近隣であり、同様な意識がここでも想定されるというわけである。

もっとも、直接的に光政が後鳥羽院を思慕したことを表す資料は見当たらない。光政独自の和歌への関心が根源的な意味での書写への動機というふうにも言えるとは思う。けれども、本資料が大変な豪華本であることや、書写に関わる手間暇を思えば、この書写行為に相当な

力の入れようを感じざるを得ない。光政の真意を知りたいところである。

本資料は、近代以降も池田家に伝来したことが『池田光政公伝』から確認できるが、戦後になって林原美術館の所蔵となった。[7]

六、掲載歌について

本資料の掲載歌について見ておこう。以下は歌人の順番①から⑩、その中の部立と掲載歌数を記したものである。

【歌人順・部立・歌数】

①前斎院式子内親王
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　旅宿五首
山家五首　鳥五首　祝五首（全百首）

②二條院讃岐
春二十首　夏十五首　穐二十首　冬十五首　戀十首　羈旅五首
山家五首　鳥五首　祝五首（全百首）

③小侍従
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　山家五首
羈旅五首　鳥五首　祝五首（全百首）

④丹後
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　旅五首　山家五首　鳥五首　祝五首（全百首）

⑤御室
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　山家五首
羈旅五首　鳥五首　祝五首（全百首）

⑥前大僧正慈円
春二十首　夏十五首　秋十九首（新編国歌大観『正治初度百首』番号における六五一番歌の上句と六五二番歌の下句がつながって一首に）（冬・表記なし）十五首　戀十首　羈旅五首　山家五首
鳥五首　祝五首（全九十九首）

⑦入道右大臣静空
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　羈旅五首
山家五首　鳥五首　祝五首（全百首）

⑧沙弥釋阿
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　羈旅五首
山家五首　鳥五首（たくみとり・みやまつくみ・かはらすゝめ・はやふさ、しらふのたか）　祝五首（全百首）

⑨沙弥生蓮
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　山家五首
羈旅五首　鳥五首　祝五首（全百首）

⑩沙弥寂蓮
春二十首　夏十五首　秋二十首　冬十五首　戀十首　山家五首
羈旅五首　鳥五首　祝五首（全百首）

まず③小侍従であるが、新編国歌大観が九十九首を収めているのに対して、ここでは百首すべてが揃っている。もっとも、肥前松平文庫の『小侍従集　別本（正治初度百首）』には新編国歌大観に抜け落ちた歌が記されていて、山崎氏によって既に報告されている。よって、全くの新発見ではないのだが、肥前松平文庫本に収められた冬部の歌「さらぬたにきそのかけちはあやうきにいかにたはしる霰なるらん」と同じ「さらぬたに木曽のかけちはあやうきにいかにたはしるあらし（れカ）

なるらん」が、本資料にもあることは確認しておくべきであろう。本資料では「あらし」の「し」に「れカ」とあり、歌意を見れば「あられ」であろうから、これは修正されるべきである。このことから、小侍従の失われた和歌一首は、ここでさらに復元されるべき根拠を得たということになる。

次に⑥慈円の歌であるが、本資料では九十九首しか収められてない。これは、新編国歌大観番号における六五一番歌の上句と六五二番歌の下句が目移りによってつながってしまったものであり、秋部の歌二首が一首に統合された結果としてある。部立の「冬」の表記のないのは、そのことから生じた混乱によるのであろう。ところで、続群書類従本の方も春の一首が抜け落ちている。こちらは単に春部が一首抜けたに過ぎない。これは、新編国歌大観で補うことができる。よって、続群書類従本の抜け落ちと本資料の問題とは関係がない。

七、本文について

本資料は新編国歌大観の『正治初度百首』と比べた場合、多くの異文や歌順の相違が見られる。もっとも新編国歌大観が二十三人の和歌おおよそ二千三百首を収めているのに対して、本資料は約千首を収めているのに過ぎないので、単純に比較できない面もある。また、『正治初度百首』というテキストに収まっていない、この百首歌群の中の個別の百首を記載する写本もそれなりにある。よって、個別百首の方の資料の検討もされるべきであろう。

以下は、式子内親王詠歌の翻字と主な校異である。異同もあまたあって、現行諸本と異なっている点の多いことは注目に値する。なお、各行頭の数字は本資料の歌順番号であり、各行尾の番号は対応する新編国歌大観の番号である。また、校異は新編国歌大観本（底本は宮内庁書陵部本、内閣文庫本を用いて校訂）と続群書類従本を用いて行った。本文の異同の多くあることが了解されよう。

春　　前斎院式子内親王

0001 峯の雪もまたふるとしの空なからかたえかすめるはるのかよひち（204）

0002 山ふかみはるともしらぬ松の戸にたえ〳〵かゝるゆきの玉水（205）

0003 ゆきゝえてうらめつらしきはつ草のわつかに野へもはるめきにけり（206）

校異　わつか（国）はつか（群）はつか

0004 にほのうみや霞のうちにこく舟のまほにも春のけしきなるかな（207）

0005 あし引の山のはかすむ曙にたによりいつるとりのひとこゑ（208）

0006 なかめやる霞のすゑはしら雲のたなひくやまの明ほのゝそら（209）

0007 袖のうへにかきねの梅はをとつれてまくらにきゆるうたゝねのゆめ（210）

0008 なかめつるけふはむかしになりぬとものきはのむめはわれを忘るな（211）

0009 いまさくらつきぬとみえてうすくもり（欠字）にかすめるよのけしきかな（212）

校異　（欠字）　（国）春（群）春

0010 （欠字）つほとの心のうちに坼花をつゐによしのへうつしつる哉（213）

校異　（欠字）「ま」か　（国）ま（群）ま

0011 みねの雲ふもとの雪にうつもれていつれをはなとみよしの丶さと（214）

0012 たかさこのおのへのさくらたつぬれはみやこのにしきいくへかさねぬ（215）

校異　かさねぬ　（国）かすみぬ（群）かすみぬ

0013 とふ人もおらてをかへれうくひすのはかせもつらきやとのさくらを（216）

0014 霞ゐるたかまの山のしら雪ははなかあらぬかかへるたひ人（217）

0015 ゆめのうちも移ふはなに風吹てしつ心なきはるのうた丶ね（218）

0016 けさみれはやとのこすゑに風過てしられぬゆきのいくへともなく（219）

0017 いまはた丶かせをもいはしよしの川いはこすはなのしからみもかな（220）

校異　はなの　（国）花に（群）花に

0018 花はちりその色となくなかむれはむなしきそらに春雨そふる（221）

校異　花はちり　（国）花はちりて（群）花は散て

0019 みつくきのあともとまらすみゆる哉浪と雲とにきゆるかりかね（222）

0020 なきとめぬ春をうらむる鶯のなみたなるらし枝にか丶れる（223）

夏

0021 さくらいろのころもにもまたわかなくにはるをのこせるやとの藤なみ（224）

校異　わかなくに　（国）わかるるに（群）わかる丶に

校異　藤なみ　（国）藤かな（群）藤かな　なみイ

0022 まつさとをわきてもやらす郭公卯の花かきのしのひねのこゑ（225）

校異　わきてもやらす　（国）分きてやもらす（群）分てやもらす

校異　花かきの　（国）花かげの（群）花かけの

0023 ほと丶きすき丶つる雲をかたみにてやかてなかむるあり明のそら（226）

校異　き丶つる　（国）なきつる（群）なきつる

0024 聲はして雲路にむせふほと丶きす涙やそ丶く夜はのむらさめ（227）

校異　夜はの　（国）よひの（群）よひの

0025 郭公よこ雲かすむ山のはのあり明のになをそかたふく（228）

校異　かたふく　（国）かたらふ（群）かたらふ

0026 水くらき岩まにまよふ夏むしのともしけたてもよをあかすらん（229）

校異　まよふ　（国）まがふ（群）まかふ

校異　けたても　（国）けちても（群）けちても

校異　あかすらん　（国）あかすかな（群）あかす哉

0027 さみたれの雲はひとつにとちはて丶ぬきみたれつるのきの玉水（230）

0028 いにしへをはなたち花にまかすれはのきのしのふに風かよふなり

（231）
0029 かへりこぬむかしを今とおもひねのゆめのまくらににほふたちはな（232）
0030 まくすはらうちかせなるゝ夏のよの秋たちそむるせみの羽衣（233）
校異　夏のよの　（国）夏の夜は（群）夏の夜は
0031 すゝしやとかせのたよりを尋ぬれはしけみになひく野へのさゆりは（234）
0032 さよふかきいはもる水のをとさえてすゝしくなりぬうたゝねのとこ（235）
校異　さよふかき　（国）さよふかみ（群）さよふかみ
0033 いけさむきはすのうはゝに露はゐぬ野へのいろなる玉やしくらん（236）
校異　うはゝに　（国）うき葉に（群）うき葉に
0034 露のいろも秋ちかしとやさよ更てまかきの荻のおとろかすらん（237）
校異　露　（国）月（群）月
0035 秋かせをかりにやつくるゆふくれの雲のちかきまてゆくほたるかな（238）
校異　秋かせを　（国）あき風と（群）秋風と
秋
0036 うたゝねのあさけの袖にかはるなりならすあふきの秋のはつかせ（239）
校異　あさけの袖　（国）あさけの風（群）朝けの風
0037 なかむれは木のまうつろふ夕月夜やゝけしきたつ秋のそらかな（240）
0038 日くらしのこゑもつきぬる山陰にまたおとろかす入あひのかね（241）
0039 あともなき庭の浅ちにむすほゝれ露のそこなる松むしのこゑ（242）
0040 わかゝとのいなはの風におとろけはきりのあなたにはつかりのこゑ（243）
0041 かせかへる浪の花すり乱つゝしとろにうつすまのゝ浦はき（244）
校異　かせかへる　（国）よせかへる（群）よせかへる
0042 しら露のいろとる木々のをそけれと萩のした葉そ秋をしりける（245）
校異　木々の　（国）木木は（群）木々は
0043 秋といへはものをそ思ふ山のはにいさよふ雲のゆふくれの空（246）
0044 はなすゝきまた露ふかしほに出てなかめしと思秋のさかりを（247）
0045 かり衣みたれにけらし朝露にひくまのゝ邊にはきの下露（248）（書陵部本は「はき」を「荻」とする）
校異　けらし（国）けらし（群）けらし
校異　朝露に（国）あづさ弓（群）梓弓
校異　下露（国）した露（群）下つゆ
0046 萩のうへにかりの涙の置露はこほりにけりな月にむすひて（249）
0047 なかめわひぬ秋よりほかの宿も哉野にもやまにも月やすむらん（250）
0048 更にけり山のはちかく月さえてとをちのさとに衣うつなり（251）

0049 校異　うつなり　（国）うつこゑ（群）うつ聲
故郷はむくらの丶きもうらかれてくまなくはる丶月のかけかな
（252）

0050 校異　くまなく　（国）よなよな（群）よな〳〵
とけてねぬ神さへ色に出ねとや露ふきむすふ峯のこからし（253）

0051 しるきかな浅茅色つく庭の面に人めかるへき冬のちかさは（254）

0052 秋の色はまかきにうとく成行とたまくらなる丶ねやの月かけ
（255）

0053 校異　たまくらなる丶　（国）枕になるる（群）枕になる丶
あさち原はつしもむすふ長月のあり明の空におもひきえつ丶
（256）

0054 梧の葉もふみ分かたく成にけりかならす人をまつとなけれと
（257）

0055 おもへともこよひはかりの秋の空ふけゆく雲に打しくれつ丶
（258）

冬

0056 神な月みむろの山の山風にくれなゐく丶るたつたかはかな（259）

0057 こすゑには残るにしきもとまりけり庭にそ秋のいろはたちける
（260）

0058 みるま丶に冬はきにけりかものゐる入江のみきはうす氷して
（261）

0059 校異　うす氷して　（国）うすごほりつつ（群）うす氷つ丶
時雨つ丶よもの紅葉はふりはて丶あられそおつる庭のこのはに
（262）

校異　このはに　（国）このはに（群）このはに

0060 あれくらす冬の空かなかきくもりみそれよこきる風きほひつ丶
（263）

0061 あしかものはらひもあへぬしもの上にくたけてか丶るうす氷かな
（264）

0062 あられふる野ちのさ丶はらふし侘てさらに宮こをゆめにたにみす
（265）

校異　さ丶はら　（国）しの原（群）しの原

0063 さむしろのよはの衣手さえ〳〵てはつ雪しろしおかのへの松
（266）（書陵部本は「よはの」を「夜の」とする）

0064 むれてたつそらも雪けにさはかれてこほりのとこやをしそ鳴なる
（267）

校異　さはかれて　（国）寒えくれて（群）寒くれて
校異　こほりのとこや　（国）氷のねやに（群）氷のねやに

0065 身にしむは庭火のかけもさえのほるしも夜のほしの明かたの空
（268）

0066 あまつ風こほりをわたる冬のよのおとめの袖をみかく月かけ
（269）

0067 日かすふる雪けにまさるすみかまのけふりもさむしおほ原のさと
（270）

校異　さむし　（国）さびし（群）さひし

0068 わたの原ふかくや冬のなりぬらんこほりそつなくあまのつり舟
（271）

0069 人とはぬ都のほかのすまひにもはるはとなりにちかつきにけり
（272）

校異　すまひにも　（国）雪の中も（群）雪のうちも

0070 をのつからなからへは猶いく度かとしをむかへてあはれと思はん
(273) 校異　としを　（国）おいを（群）老を

戀

0071 しるへせよあとなき浪にこく舟のゆくゑもしらぬやへのしほ風
(274) かくとたにいはかきぬまの身をつくしる人なみにくつる袖かな
0072 (275) ゆめにてもみゆらん物をなけきつゝうちぬるよひの袖のけしきは
0073 (276) わか戀はしる人もなしせくとこのなみたもらすなつけのをまくら
0074 (277) しらせはやすかたの池の花かつみかつみるまゝになみのしほると
0075 (278) 校異　なみのしほると　（国）浪にしをるる（群）袖そしほる、
0076 (279) わきもこか玉ものすそによる波のよるとはなしにほさぬ袖かな
0077 (280) あふことはとをつのはまの岩つゝしいはてやくちんそむる心を
校異　そむる心を　（国）そむる心を（群）すむる心は
0078 (281) わか袖はかりにもひめやくれなゐのあさはのゝらにかゝるゆふつゆ
0079 (282) あふことはけふ松かえのたむけ草いくよしほるゝ袖とかはみる
校異　袖とかはみる　（国）袖とかはしる（群）袖とかはしる
0080 (283) まちいてゝもいかになかめん忘れねといひしはかりの有明の月
校異　忘れねと　（国）わするなと（群）わするなと
校異　有明の月　（国）有明の空（群）有明の空

旅宿

0081 都にて雪まはつかにもえいてし夢引むすふさよの中山（284）
0082 (285) あらいその玉ものとこにかりねしてわれからそてをぬらしつる哉
0083 (286) 宮こ人おき津こしまの濱ひさしひさしくなりぬ浪ちへたてゝ
0084 (287) 行すゑはいまいくよとかいはしろのをかのかやねに枕むすはん

山家

0085 (288) 松かねのをしまか磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは
校異　をしまか磯の　（国）とじまが磯の（群）をしまか磯の
0086 (289) 我かやとはつま木こりゆく山かつのしは〳〵かよふみちはかりして
校異　みちはかりして　（国）跡ばかりして（群）路はかりして
0087 (290) 今はわれ松のはしらの枚の庵にとつへきものをこけふかき袖
校異　とつへきものを　（国）とづべきものを
（群）とふへき物を
0088 (291) 山さとは峯の木の葉にきほひつゝ雲よりおろすさをしかのこゑ
校異　山さとは　（国）山のはは（群）山の端は

0089 柴の戸を人こそとはねあし曳のやまよりいつる月はまちみつ（292）

校異　月はまちみつ　（国）月はまづみつ（群）月はまつみつ

0090 山さとは峯にたえせぬ松のこゑこの葉にしのふ谷のした水（293）

鳥

0091 暁のゆふつけとりそあはれなるなかきねふりをおもふまくらに（294）

校異　まくらに　（国）涙に（群）泪に

0092 なくつるのおもふ心はしらねともよるのこゑこそ身にはしみけれ（295）

0093 身のうさをおもひくたけはしの丶めのきりまにむすふしきのはねかき（296）

校異　むすふ　（国）むせぶ（群）むせふ

0094 いかなしや風にた丶よふ浪のうへにほのうきすのさてもよにふる（297）

校異　いかなしや　（国）はかなしや（群）はかなしや

校異　よにふる　（国）よをふる（群）よをふる

0095 うちはらひをの丶浅茅にかる草のしけみかすゑにうつらなくなり（298）

校異　なくなり　（国）たつなり（群）立なり

祝

0096 君がへんちよ松風にふきそへて竹もしらふる聲かよふなり（299）

0097 あめのしためくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末〳〵（300）

0098 いくとせのいくよろつ世か君かよに雪月花のともを待見む（301）

校異　待見む　（国）まちけん（群）まちけむ

0099 かめのおのいはねかうへにゐるたつのこ丶ろしてける水のいろかな（302）

校異　ゐるたつの　（国）ゐるたづも（群）ゐるたつも

0100 君か代はちくまの川のさ丶れ石のこけむすいはとなりつくすまて（303）

このように式子内親王の詠歌に限ってみても、従来の諸本との違いは明らかであり、歌意にも関わるところが多く見受けられる。その一つ一つの検討は今後に譲ることにするが、本資料の独自性をひとまず理解されたい。

八、まとめに

本資料は『正治初度百首』に関わる重要な写本であり、今後、詳細な検討を進めたいと思う。また、全文の翻字を進め、機会があれば公刊したいとも考えている。現在のところ、本資料の最も重要なところは、巻末の「賜題目録」に違いないのであるが、これもさらなる検証が求められる。

林原美術館所蔵資料の中には文学研究の上で重要なものが多く、本資料もそうしたものの一つである。特に池田光政など藩主筆の資料については、その祖本とも関わって、多くの可能性が秘められていると言ってよい。しかしながら、その考察は十全ではない。近世期の資料においても、藩主家の力量によっては、前時代の資料以上の価値が見出せると考えるが、いかがであろうか。ともあれ、今後の調査・研究

の方向性として、こうした近世期写本の可能性を特に強調しておきたいと思う。

【注】

（1）山本真吾「平家物語に於ける漢語の受容に関する一考察―「上皇御所」の呼称をめぐって―」『国語学』一五七集（一九八九）、また馬耀「『江都督納言願文集』における「姑射」の用法―平安前・中期漢詩文との比較を通して―」『日本語と日本文学』五三号（二〇一二）などを参照されたい。

（2）太田晶二郎「「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」「今鏡」著者問題の一徴證など」『太田晶二郎著作集』第二冊、（吉川弘文館、一九九一）を参照されたい。

（3）『正治初度百首』の伝本については、山崎桂子『正治百首の研究』（勉誠出版、二〇〇〇）に詳細が載っている。同書における研究成果は小論において最大限に活用させていただいた。

（4）有吉保『新古今和歌集の研究　基盤と構成』（三省堂、一九六八）から。

（5）山崎桂子『正治百首の研究』から。

（6）原豊二「池田光政と「抜書」―『風葉和歌集』『拾遺百番歌合』をめぐって―」『ノートルダム清心女子大学紀要・日本語日本文学編』四〇巻一号（通巻五一号）（二〇一六）を参照されたい。

（7）浅利尚民「旧岡山藩主池田家の近代における文化財管理の実態について」『林原美術館紀要・年報』三号（二〇〇八）、ならびに浅利尚民「池田光政所用品」の伝来と現状について」『閑谷学校研究』一八号（二〇一四）を参照されたい。

（付記1）本稿を執筆するにあたり、貴重な資料を閲覧させていただいた林原美術館ならびに同館の浅利尚民氏に感謝申し上げます。また、専門分野についてご教示いただいた山崎桂子氏にも御礼申し上げます。

（付記2）小論の入稿後に『和歌文学大系　正治二年初度百首』（明治書院、二〇一六）が刊行された。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」（二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美）による研究成果の一部である。

写真１　内題と作者目録

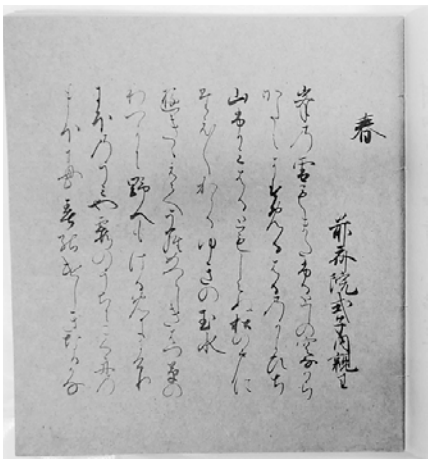

写真２　式子内親王百首歌冒頭

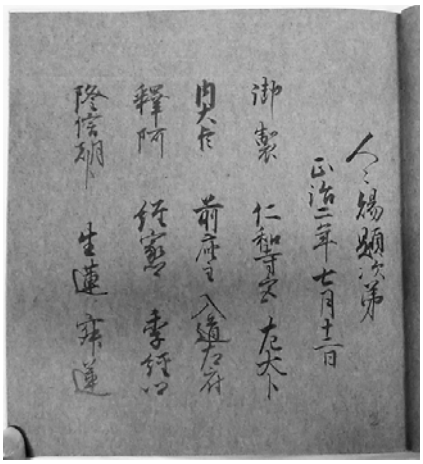

写真３　賜題目録（前半）

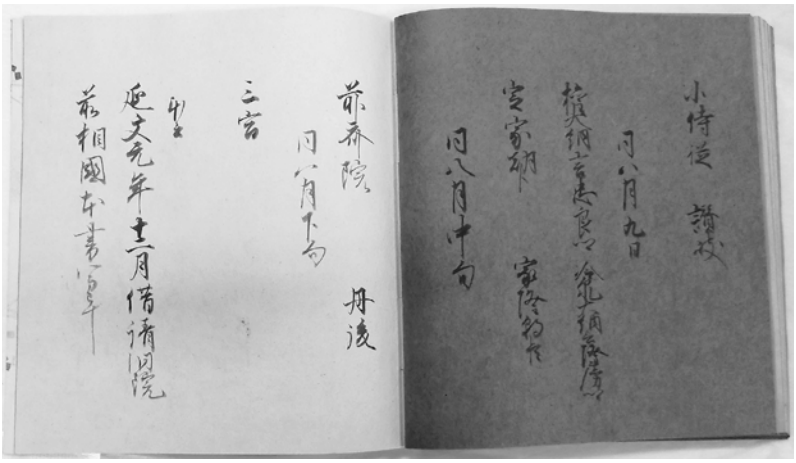

写真４　賜題目録（後半）と奥書①

写真６　後鳥羽院御影塔
（倉敷市林・五流尊瀧院）

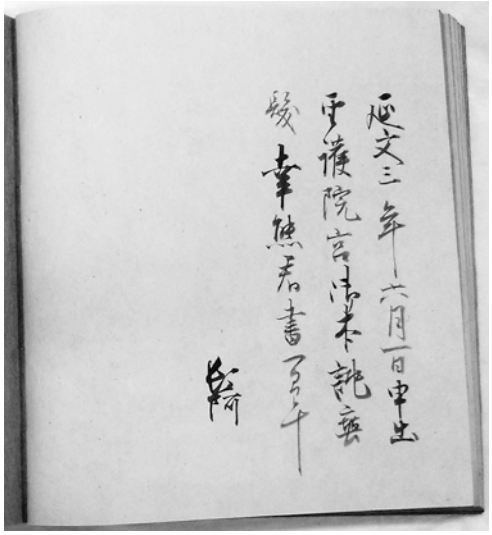

写真５　奥書②

写真８　伝覚仁法親王墓所
（倉敷市林・五流尊瀧院）

写真７　頼仁親王墓所
（倉敷市木見）

About “Shazan-Hyakushu-Waka” owned by the Hayashibara Museum, reproduced by Ikeda Mitsumasa and others

HARA Toyoji
（Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University）

〔Abstract〕

Ikeda Mitsumasa copied and reproduced many books, which were important on the research of Japanese classical literature. “Shazan-Hyakushu-Waka” owned by the Hayashibara Museum is one of the variation of “Shoji-Shodo-Hyakushu” by Gotobain. This book was connected by Tonna, and has many original descriptions. This article introduces this interested book.

Keyword：Ikeda Mitsumasa, Gotobain, Tonna, “Shoji-Shodo-Hyakushu”, “Shazan-Hyakushu-Waka”